

仏向上事の人（証上妙修）の章

1 凡夫の時間とは

しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のことばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき。たとゑば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり。いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎたりて、いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地となりとおもふ。

仏向上事の人章は、第一蓋時の章、第二仏の時間と凡夫の時間の章、第三身心脱落の章、第四正当恁麼時章の延長であり、それらの内容が具体的に示されるのが本章である。身心脱落章で明らかにされた、自己宇宙一切が時々であると悟りの観点が明確化され、第四正当恁麼時章では自己も万象も一切が時であり、自己が体験する以外に宇宙は無いことを、前章で道元が開示し、本章仏向上事の人章では身心脱落の内証体験である蓋時の全体構造を論理的に明らかにする。禪師が現実的喩話をもって、凡夫の時間の世界から仏の真実の蓋時の世界へと導いてくれる。

「しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のことばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき」

しかあるを、そうではあるけれども、仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、仏法を学ぶこともなく、悟りの体験を得ることもなく、真実の自己並びに森羅万象の真実相が蓋時であることを知ることではない。

凡夫は時間空間の言葉を聴くとき、ある時は三頭八臂の怒りの自己と思い、ある時は丈六八尺の仏様のような自分であると思う。ここは自己と時間の進行と万象の去来の相関を述べる。

「たとえば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり。いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎたりて、いま玉殿朱楼に処せりと、山河とわれと、天と地となりとおもふ」

前文は自己が認識する時空世界を問題にしているのに対し、本文は客観世界である万象の「宇宙」・「空間」・「山河」の「去来」と、「自己」との相関がテーマとしている。「たとえば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり」と、たとえばとは例をあげると、河をすぎ山を過ぎるの意味を、会社に出勤するサラリーマンの事例で説明してみよう。

自宅にて朝起き朝食を摂り出勤する。この位置がA時点である。即今即時には客観の万象世界である、自宅の室内や窓の外の風景や、町並みや空や木々が朝の光に照らされ、自己の視覚野に画像化され心が実体化される。B時点は自宅を出て電車に乗り勤務先である、会社に到着し仕事を始める。C時点は五時で仕事が終了し夕暮れの町を歩いて帰宅する。河をすぎ山をすぎとは、凡夫が体験する時間の進行と環境世界の認識体験を表している。

確かに、道元は山や河や天や地は存在し認識ができる。事実、家を出て会社に行き帰宅し晩酌しながらテレビをみる。他の人々も自己と同体験上の時空世界の中に、共存しているものと信じている。そして事実の世界であると思う。

「いま玉殿朱楼に処せり山河とわれと天と地なりとおもう」

凡夫は宇宙空間の中を河をすぎ山を過ぎて、即今の即時の家や会社や玉殿朱楼に到着し、此の場所と位置に存在しているものと認識する。そこから客観世界を眺めると、山を上り河の水の流れの中で足を濡らして渡ってきた、自己体験は確か真実であると。そして此の地に到達したと思う。このように認識するのが凡夫の時間観である。道元はこのような時間観は時間の一面であり、次に仏の真実の時間の世界を明らかにする。

2 仏の時間とは

しかあれども、道理この一条のみにあらず。いはゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去来の相にあらずは、上山の時は有時の而今なり。時もし去来の相を保任せば、われに而今ある、これ有時なり。かの上山渡河の時、この玉殿朱楼の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや

本文の解釈は難渋である。安谷師も「参究」の中で難儀であると述べている。では何故道元の云うとする教意が凡夫には理解し難いのか。わたしなりに考えてみると、一つは仏の観点と凡夫の時空観の理解が明確でないこと。二つは明確であったとしても、論理的に文章として表現化することが困難であること。なぜなら、禅師が表現する内容が重層的な論理構造で成立している。

例えば前文で示した、仏の観点の非論理性と凡夫の論理性の二つの相関を明確化にしなければならない。二、脱落の悟りの境地は覚知体験を超越し認識領域を超えた、高次元の内容であり、凡夫の頭脳上にイメージとして描きにくい。三、時空世界との円融相即の具代的な内容構造の明確化が困難である。最後に、前後際断の蓋時を当体全是か挙体全真のどの視点で説くかである。

このように、論理が複雑であり、あらゆる論理的表現方法を超えた内容が説かれている。そのため、古今の各師が注解に難渋する最大の要因であると考えられる。

複雑で難解な本文を、私は三つの例えによって明らかにしてみる。1、凡夫の時空世界 2、無限領域の喩話 3、電車の交叉対面の話。これらの3つの喩話で仏の時間を解明してみたい。

「しかあれども、道理この一条のみにあらず」

前文の延長であるから、凡夫位の視点の時空観でないことを、道理一条のみにあらずと表示している。仏の時空観の開示だ。「いわゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし、われすでにあり、時さるべからず」では、山をのぼり河をわたりし時にわれありき、とはどのように理解したらよいのであろうか。

前文で説かれた、山をのぼり河をわたりの心意は、凡夫の時空世界（5W-H）の自宅A時点から会社B時点そして帰宅C時点へと、自己の行動範囲と同時に随伴する、時間の進行と客観の環境世界の説明のことである。

確かに自分は宇宙空間の中を移動した事実と、時間の進行の認識は間違いがないと思う。しかし、禅師は仏の無限領域世界（永遠）の即処に存在したと説かれる。

「われに時あるべし、われすでにあり、時さるべからず」

禅師は始めから自己は時空を超えて即処の位置に存在し、そして、自己が時間そのものであり、当時から一步も移動しないで、即時点に存在したと明言する。私たち凡夫は宇宙空間（環境世界・時間・自己・他己・行為・原因・結果）の中を、自己はA時点→B時点→C時点と、あちらこちらへ移動し、生活行動しているものと信じている。

此の考え方は捨てなければならない。真実の自己の姿は即所の一点上に時空を超えて移動していないのである。私たちは宇宙空間の中を移動していたと思っていたのは、実は錯覚であったのだ。

孫悟空が三蔵法師の掌の上で動いているようなものである。思い込みの上で、時間の認識、空間内の体験、自己の五感覚によって把握された、心理映像世界の宇宙空間が実在であると。しかし、それらは錯覚上の行動の認識であって、真実は己れ自身が当初から即処を移動しなかったのである。

「われすでにあり、時さるべからず」

禅師は本文で仏の時間の世界を開示する。仏の時間と凡夫の時間の章の中で説かれた、内容を具体的に明らかにする。仏法では自己並びに森羅万象は、理体（実相、仏性、真

理体、不滅、空、等々)と、日常体験し知覚認識する事(自己・森羅万象)との即一の関係によって成立していると説く。

二つの相即関係を道元が明らかにしているのが次の文である。「しかあるを仏法を〜天と地なりとおもふ」までが、凡夫の認識する世界である。仏の悟りからみた世界が「しかあれども、道理この一条のみにあらず。〜われに有時の而今ある」である。凡夫は自己が時間や空間を移動したと思う。

それに対し、禅師は時空世界を超えて即位置に静止し、当処不動で不去来であると説く。そのため、A時点→B時点→C時点の移動進行はないのである。禅師は進行と不進行の相反する同時性を本章で明らかにするのである。

第一篇の垂直正中線脱落章(大悟の論理的説明)4山手線の瑜話の電車の交叉で、凡夫の時間観と仏の時間観を具体的に明らかにしてみよう。凡夫の時間は「たとゑば河をすぎ山をすぎ也しごとくなり天地と云々」、仏の時間観は「しかあれども〜時さるべからず」である。

凡夫は車内の椅子に坐り、始発駅から現在地に到着し、自己とともにガラス窓の外の風景の時空世界と、車両・風景との去来である十二時の時間も同伴し進行したと思う。そして、現在地に到達したものと信じる。

其れに対して、禅師は「いわゆる山を〜われに既にあり、時去るべからず」それらの体験と認識は錯覚であり、自己の存在は始めから当処に存在し一歩も移動がなかったと説かれる。それがわれすでにあり時去るべからずである。

時去るべからずの世界を具体的に、外回りと内回りの両車両が対面交叉静止上の瑜話で説明してみよう。自己は内回りの電車の椅子に坐り、外回りの車内の女性を認識する。両車両は時速二百キロメートルの高速によってお互いに相反する方向へ進行している。

事実は、高速上の体験認識の世界なのである。ようするに時速二百キロメートル即二百キロメートルが一瞬交叉する。同時・同速・静止・ゼロ時点の世界の体験と理解すべきなのだ。科学では時間の同時性とよばれている。

其の時、自己の視界から窓の外の車内の女性が明確に確認できる。真相は同時性の体験上の認識世界なのである。仏の時間の時去るべからずが静止の同時性、凡夫の十二時間の時空世界が、主観の自己と客観の女性が過去の始発駅から現在時に到達し、さらに未来に時空が進行すると相識することである。自己の存在全体は、日常生活で体験している自宅のA時間→会社のB時間→C時間の帰宅の時間進行と同時性の静止時間が一体で成立しているのである。

本章では、仏道元が進行時間と同時性の静止時間の世界を説かれるのである。そして、当に仏から観た進行と不進行の時空世界の相関を明らかにするのが本文の主眼なのだ。

時去るべからずの仏の静止時間の世界から明らかにしてみよう。

仏の静止時間とは「道理この一条のみにあらず。いはゆるやまをのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず」である。其れ

に対し、凡夫の時空観は「いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと天と地なりとおもふ」過去の山河のA点から現在の玉殿朱楼のB点に到着したと思う。当然時間の進行もA時→B時へと移動したものと信じる。

仏道元から観るとそれは錯覚で誤解していると言う。始めから当処に存在しどこにも移動がなかったことを明らかにする。即今即時のB時点上の現在点から、過去のA時点にも移動はなかったし、未来のC時点にも移動がなかったのである。この事実をしっかりと認識しないと、一連の文意は明確にならない。

此の真実を禅師は明らかにし、次の文を理解させるために第一段階として説いているのだ。電車交叉の喩話では、車内の椅子に坐る自己全存在の即時即今の認識する体験と、窓の外の女性の存在と、立ち現われている風景や時間の世界が中心テーマなのである。

再度、山手線の交叉の喩話で明らかにしてみる。山手線の右回りと左回りの電車の対面上の喩話である。車内の自己と窓の外に確認できる対車の女性の両者は、過去A点→現在B点→未来C点へと、進行しているものとお互いに認識する。真実は高速進行時間の交叉上の静止世界の体験なのである。

始めに禅師は1身心相(舟・雲) 2運動(行為・行持) 3時間(時間進行) 4位置(空・実相) 5客観の時空(・雲・岸・その他)の相関を説こうとしている。1自己の身心が2運動である山を上り河を渡り朱楼に到着したものと信じている。しかし、真実は4位置である静止不進行の実相と伴に即所から一步も移動することがなかったのである。

真実は電車の交叉上の4静止時間である位置上の自己であり、山を上り河を渡り3十二時間の進行とともに玉殿朱楼へ到達した存在であった。禅師は自己と山河と実相と時間の進行が円融し即一した真実の姿を説かれるのだ。

あらためて、全自己の存在と4静止時間の実相上と山を上り河を渡りし時もわれがあり、われに時がある。そして、始めから静止時位置に存在し時間が一步も過去のA時点にも去ることも、未来のC時点にも一步も進むことのない、空の世界を次に明らかにしてみよう。

移動のない空世界は五W一Hを超脱した世界である。前に説明したように空の本性は自己が認識する、十二時間の去来、三次元の、縦、横、高さの空間構造の知覚認識。自己の生死、万物の生滅が無いのである。列車の喩話で述べれば、列車の中の自己が、交叉時や線路やレールや地球の存在が知覚認識上にのぼらないと同じである。

本来は、列車上のI自己(2・3)交叉時とレールと地球(4)は一体なのである。時間の進行と不進行は不二の関係なのだ。凡夫は列車の進行とおなじように、過去のA時点から、現在B時点、未来のC時点へと進行していると思う。そして、窓の外の環境世界である、風景世界の中を、山河と同伴、同歩、同随行、同進行、しているものと信じている。

道元は、山を上り河を渡り過ぎたときも、自己はそこに存在し、そのまま蓋時の全体相であり、即処の不進行の実相と伴に歩み続けているのが、真実であると説かれる。時

間の超脱と時間の現成のことである。河を過ぎ山を上り様々な自己体験と、時間の進行の、過去のA時点→現在のB時点へと移動し、宇宙空間内で山や河を実地体験してきたときも、実相と同時同歩同進行し継続するのが真実の世界であったのだ。

道元が『有時』で説く仏の時間と凡夫の時間の相即関係は、私たちの日常生活とは別次元の世界のことではなく、自己の存在そのものの真実の姿なのである。

禅師は真実の全体相を、即今の私、自己、われ、即時のあなた自身、眼前の一本の花の開花を問題のテーマとしている。そして、自己の即今足下の事実相を道元は開示しているのだ。過去にも未来にも移動しない、即今足下の自己の世界を、「いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地となりとおもふ」の真意なのである。此の観点によって「上山の時は有時の而今」を、次に仏から当に観る時間論を開陳する。

「われに時あるべし、われすでにあり、時さるべからず。時もし去来の相にあらずは、上山の時は有時の而今なり。時もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり」

本文の内容を具体的に再考してみる。禅師が説く要旨は、前文で説いた過去A時点の山に上り河を渡って来た事実を問題化している。と同時に、「かの上山度河の時、この玉殿朱楼の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや」の二つの文の内容はセットである。「しかあるを、仏法をならはざる凡夫から～時さるべからず」までが仏の時間と凡夫の時間の相関を説く内容であった。

本文は「身心脱落」章と即一の関係にある。凡夫の宇宙と仏の宇宙を脱落した、「自己・時間・宇宙空間・山河」と、の関わりを問題化している。本文を理解するために、身心脱落の体験を理解することが重要である。次に身心脱落の体験を具体的に垂直正中線で明らかにしてみよう。

身心脱落の論理的な全体相構造は、『第一編』の「身心脱落章」でと明示したつもりである。身心脱落の概要を論理的に説けば、「垂直」と「正中」と「線」と「透脱（通貫）」の、四つに分けることができる。

垂直とは、自己全存在が全時空世界の座標軸点として、無形の無限領域（永遠）を一本の垂直線に例えたのである。正中とは、マクロ的宇宙世界（岸）と、ミクロ的宇宙（舟）の自己の身心と実相が、重層円融した即一の意味である。線とは、垂直に伸びた一刹那時全体が、無限領域世界を表し、そのまま完結している意味だ。禅師の身心脱落の直観的体験の世界を、論理的に明確にするため用語で表示したのが、「垂直正中線脱落」である。

下記の1—4は、身心脱落（垂直正中線脱落）の体験全体を要約したものである。

- 1 「マクロの時空世界の宇宙空間」(尽虚空尽大地、天水岸)
- 2 「即今の山と即時のB時」(尽大地岸移)
- 3 「ミクロの主観の自己の身心と即時」(舟と舟行と雲と雲駛)
- 4 「不進行の円形虚空の時空脱落の理体」(月と月運)

1—4の全体の境地が垂直正中線(1・2・3・4)で現される。垂直線の前と後は、時間的に過去と未来の前後際断されている。空間的な前と後、左と右も際断された境位である。自己の身心と月、客観と主観も前後際断されたのが「垂直正中線」である。亦、「仏性」巻の能観・所観ではなく、不自観不他観の境地であり、『中論』「八不」の不生不滅・不常不断・不一不異・不来不去のことである。

其れに対し、「垂直正中線脱落」〈永遠〉(刹那時・時間・空間・客主・自己、真理、前・後・左・右、身心・自己・仏性)の身心脱落は、前後に片寄ることがなく、垂直線上の前と後が前後際断されている。身心脱落とは機発起縁によって、無形の本の垂直線全体を直下貫通し全時空世界が崩滅し透脱するのである。

列車の例えで脱落の体験世界を具代的に明らかにしてみよう。正中とは、1・2のミクロ的宇宙の自己(主観)の身心(雲・舟)と3のマクロ的宇宙(尽虚空・大地・天水岸)と4の円形虚空(月・ルール)は一体で円融している世界なのである。正中とは二つの世界が、「即」・「蔵身」・「円融」した境地である。

垂直線とは正中を貫通し、前後際断した刹那時全体のことである。正当時とは無形の垂直線上(雲駛・舟行・月運・岸移・同時・同道・同歩・同運)に一切が円融・調和・蔵身した境地の世界を示している。

二つの境地を、「列車の自己」と「山の手線の電車の交叉」の喩話で説明してみる。凡夫は宇宙空間(虚空と天と水と岸)と、十二時間(過去、現在、未来・移)の世界の中で生活している。道元は山をのぼり河をわたりしの自己(雲と舟)で表示している。

車内に坐る自己の身心全体が列車全体の進行時間を現わし、生滅そのものである。自己が乗った、始発駅(行)のA時点→其の地の時空世界の中を、山や河の風景を眺めながら、時間(風景の去来、列車の進行)の進行とともに、此の地に到着した(舟に乗り帆をつかうこと)。現在のB時点上の玉殿朱楼上に到着したことである。見る主観の自己と立ち現れる客観の窓の外の景色のことを示している。そして、列車の進行方向に→未来のC時点があると思う。このような時空観を禅師は錯覚であり、刹那生滅する時間の世界を明らかにする。次に凡夫の時間より、高速で刹那生滅円環する時間世界を開示してみる。

3 刹那時間と円環時間

凡夫が認識する時間観を超えた、超高速の時間系が仏教の教えに存在する。原始仏教

の説一切有部の刹那生滅論である。独楽の喩話で刹那生滅を具体的に説明してみる。凡夫の時間は独楽本体と絵模様の回転のことである(岸移舟行)。刹那生滅時間は軸心の超高速回転運動を現し、一日一夜の間に六十四億九万九千九百八十刹那(月運)進行する。静止時間(月)が軸心点である。刹那生滅論は、これらの三つの異なった時間が蔵身した時間論である。

刹那生滅時間は、凡夫の時間の過去→未来・因→果と月の永遠不滅の時間が即一蔵身され、同時同道同歩同運で成立している。この三つの時間が円融したのが「正中」である。線とは無限領域の一本の垂直線が貫通されたのが「線」の意味だ。線全体の存在の境地が一刹那時間全体相を表し示している。

前後際断とは垂直に延びた一刹那時間の前・後を示している。流動・回転・進行している刹那時全体の左の前と右の後との両際が際断されている境地である。左の過去のA時点の一秒後、右の未来のC時点の一秒前、の前後は際断され、当に一秒のB時点と当に一刹那時の前後の、過去のA時点↓、未来のC時点↑(前0、0000I35秒前と後0、0000I35秒後)際が切断している。前後際断した正当時全体が線の例えなのである。無形の正当時全体線上(永遠)は時間の進行は無く永遠時なのである。永遠時間は静止しているのではなく、流動・円環・円転しているのだ。

判りやすく説明すれば、3刹那生滅の時間系を全宇宙の座標軸時点として、螺旋円環構造の世界なのである。独楽の例えで述べれば、独楽の外円が道元の十二時間の世界であり、二十四時間の時間系、軸心が永遠に道環し円転する刹那時系である。不滅の静止系に、二つの時間が蔵身されている。刹那時間を円の起点として、横軸時間が螺旋・円環・円転し、垂直的スパイラルするのではなく、並列的に進行する世界と考えるべきなのである。時空世界を脱落し、弧円全体が円転する全体相が、刹那時であり、道環であり、永遠時なのである。

当に永遠時上の←天辺の一点が、二十四時間の時系の流れであり、而今のB時のI秒が正当時である。永遠時上の一点が起↑滅→起↓滅←起の上と下と、宇宙世界線にそって円環運動していると考えべきである。A過去時→B現在時→C未来時へと移動して行くように見える。が、そうではなく、真実は前後際断した「刹那時」の正当秒と、「真理の永遠時」の静止と、「二十四時間の進行のBの正当秒」が円融した、上昇下降の運動によって成立しているのである。真実は移動進行していないのに移動していると、錯覚した認識と理解すべなのである。刹那時全体が、起・滅する、スパイラル的構造の時間の世界なのだ。

道元は無限に継続する円環的時間の世界と、身心脱落した自己が行持していく全体像を、行持の巻で、このように説かれている。「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず、発心、修行、菩提、涅槃、しばらく間隙あらず、行持道環なり」永遠に円環・円転・転円・刹那に起滅する当体での、発心であり、修行であり、菩提であり、涅槃なのである。と、同時に刹那時全体に一切が蔵身しているのだ。

私たちの生命は、刹那生滅する三つの時間系の超立体的構造の来・起・滅・動で、生起しているのである。そして客観のマクロ的宇宙空間時間体験上の世界と、主観のミクロ的宇宙空間時間が、相関・円融・同時・同伴に、自己の全生命時間である、第一の二十四時間の列車の進行の、過去A時空→現在B時空→未来C時空と刹那生滅時間の一日一夜に六十四億九万九千九百八十刹那と超脱時間が円融した存在なのである。

道元は、『栢樹子』巻で「栢樹成仏する毎に虚空落地するなり。その落地響きかくれざるごと、百千雷よりもすぎたり。「栢樹成仏」の時は、しばらく十二時中なれども、さらに十三時中なり。」。禪師は栢樹成仏の時は、虚空（尽宇宙世界が崩滅する）落地（脱落）する。落地の時節は雷が百千の落下する響より、全宇宙世界に大音響が轟くような体験であると説かれる。

また、其れだけではなく、落地成仏時はしばらく十二時中（凡夫時間・直線時間・風景進行）即さらに十三時中（静止時間・交叉・）である。そして、時中即時中である。ようするに、中（円融）で凡夫時間即静止時間は分離ではない。時中が刹那時間なのである。

このように、私たちの身心存在全体は、電車の時間系の十二時の流れと、電車が刹那時間にスライスされた刹那生滅の時間系と永遠の時間系の十三時が、同時・進行・生滅によって成立していると理解すべきなのである。

もう一度、列車の自己の視点によって、垂直正中線脱落を具体的に解説してみよう。座席に坐り窓の外の山河を眺める。見る主観の自己の身心が存在し立ち現われる客観の山や河や空や花が存在する。

凡夫の時空観から眺めると、全宇宙空間の時間の流れは、過去時→現在時→尽未来時まで、等速で直線的に進行続けると思う。そして、空間に存在するところの、物々各々は、宇宙の絶対時間の流れとは別次元の存在物として、各自が自己の時間系で進行しているとおもう。

見ている自己の身心全体も、広大な宇宙空間と絶対時間の進行の中で、儂い小さな一個の生命体として、過去のある町のある部屋で誕生し、そこの、誕生時のA時空から→成長する時空→現在の中年のB時空→老年の未来の死滅するX時空へと、時間も進行し空間の中を移動したと思う。このような、自己観・時空観は常識的な自己の世界観である。

もし電車の各車両と自己と女性の身心全体が刹那生滅していたらどうであろうか。電車内の自己存在全体が、六十四億九万九千九百八十刹那にスライスされたの起滅相であり、一刹那一刹那が継続連動し、六十四億九万九千九百八十刹那が超高速で流動・連鎖・連結・円転・上下・運動であったとしたらどうであろうか。無形の因縁の力で連綿している。

ようするに、超微細の時間の微分化である。一刹那・一刹那が時間の点であり、一点一点の前後際断されている。その前後が際断された一点一点が点時である。起と滅の上

昇、下降、しながら円転進行し、連起・連動・連滅によって成立している。

円形が横軸のスパイラルにしたがって、六十四億九万九千九百八十の点の羅列でありながら、連結し円転している。一刹那の全体相を正当時として、超立体的重層的円融している全体が、正中線である。前後際断とは、正当時の左の過去時と右の未来時は際断された境地なのだ。

再度、正当時全体を列車の自己の体験世界によって明らかにしてみよう。正当時には見る自己の身心全体（舟と雲）即B時（舟行、雲駛）刹那生滅の一瞬時（月運）静止（月）とが相即関係で成立している。

眼の前に立ち現れる客観世界は、即今の山河の風景（尽虚空、尽大地、岸）と即B時（岸移）と刹那生滅の点時と静止（月）との、二つの主観客観が即一円融している。「列車の見る自己と見られる風景」・「電車の対面遭遇」・「独楽の外円軸心」の喩話が即一する。この体験が、垂直に伸びた一刹那時間頭在全体〈永遠〉（尽虚空即岸移即舟行即雲駛即月運）に蔵身した全体構造である。仏道元が説く時間論の教意なのである。

このような刹那時間の頭在全体の正当時には、二つの意味が含まれている。一つは、自己全体存在が時間的な自己の真実相。この正当時全体が蓋時であり、自己の全時間であり、全宇宙空間が蓋尽されると同時に永遠時である。二つは、存在、空間的意味で、自己の身心全体が尽十方世界で自己が尽くされていると、同時に不滅の当体である。刹那時間全体相の存在上の正当時には蓋時と尽現が集約されているのだ。

4 脱落と蓋時・尽現

垂直正中線脱落〈永遠〉とは、禪師の身心脱落の体験の内証のことである。脱落とは列車の例ではガラス窓が落下すること。雲門の光透脱であり、趙州の虚空落地、道元の身心脱落、漸源の世界崩壊である。全て大悟の機縁時に発する言葉である。透脱も落地も脱落も崩壊も貫通も同意である。

これらの言葉に共通しているのは、悟りの体験時には自らの身心全体の存在上に全宇宙が頭の天辺から、足下の指の皮膚の先端まで貫徹し透脱する直観的体験をする。

では貫徹とは、どのような直観的・心理的体験をするのかを推察してみよう。垂直正中線の正中とは垂直に伸びた一刹那時の頭在全体のことである。マイクロ宇宙の自己の身心全体と、現在の即B時即マクロ宇宙空間（山河）即現在の即B時が円融（舟行雲駛月運即岸移尽大地尽虚空）した境地である。

二つの即一の全体構造を列車の例えで説明する。「見ているマイクロの自己の身心の去来」と「窓の外の見られるマクロの宇宙空間」と「風景の山河の去来」の、三つが相関し成立している。

そして、即時のB時とは前と後から際断した、正中線上の点時のことである。左の過去B時点→右の未来A時点→の両際の左と右の前後が際断されている。前後際断した正

中線上の点時は二つの世界を蔵身円融している。点時である一刹那時間全体の顕在上には、全宇宙一切が統一集合され重層的構造で成立しているのである。

このような体験全体像を正中線と呼び、禪師が『栢樹子』「大師道の虚空落地時、および栢樹成仏時は、互相の相待なる道得にあらざるなり」の真意である。

正中線の時節のとき、忽然念起として刹那時間の正当時上の一点から、全宇宙が透脱し貫徹する、直観的機発機転を体験し全宇宙空間が落地する。漸源の世界崩壊のことである。禪師は世界崩壊のときを前文で述べたように『栢樹子』巻「栢樹子の成仏する毎度に、虚空落地するなり。その落地響かざるごと、百千の雷よりよりすぎたり」とこのように説かれている。脱落時には百千の雷音の轟きより、全宇宙世界が震動共響することを明らかにする。時空内（三次元空間内と時間進行）の小さな生命で在ったはずの自己全体が宇宙大の自己で在ることを覚知する。凡夫の宇宙観から覚者の宇宙観への大転換である。

体験の悟後に、当に観る時節には客観の宇宙空間の一切風景と、山河の即今即時だけで蓋尽され、過去も未来も無く、前後が際断されているのだ。

道元は、眼蔵第十『大悟』巻で、仏が当に観る世界をこの様に説いている。「いはくの今時は、人人の而今なり。令我念過去未来現在いく千万なりとも、今時なり、而今なり。人人の分上は、かならず今時也」。詮慧の『聞書』は、「此の今時は三世なき心地」と述べている。三世とは過去現在未来のことである。この三世を超えたのが、今時であることを明らかにしている。

そして、今時を具体的にこのように述べている。「三世にありつる身とこそ思つれども、今は我に三世あるなり、此の三世我等が日来思が如く、吾我に對してすぎぬるを過去ととき、住するを現在ととき、来たらざるを未来ととくは、わずかのことなり、刹那の程にも三世はあるべし」。

凡夫時間、大悟人の仏時間、刹那時間をこのように説かれている。三世にありつる身とこそ思つれどもとは、凡夫の時空世界の自己であり、時間の矢が直線的に進む時間、今は我に三世あるなりとは、即今の自己が時間であり、仏の時空観の世界である。仏の時間とは、凡夫が認識する、過ぎ去ったのが過去、即今に住するを現在、いまだ到来しない、未来の時間のことではない。刹那の程にもこの三世はあるべしとは、刹那生滅の時間のことである。

禪師が説かれる、仏の人々の分上とは、前後にかかはれざるべし、「而今の大悟は、自己にあらず他己にあらず、きたるにあらざれども填溝塞壑なり」、かならず今時也の意は、身心脱落し前後際断した、刹那時全体を今時人と呼ぶのである。私自身は蓋時と呼ぶ。

前後が際断された、当に一刹那時間全体の正当時の点時が蓋い尽くす時には、一切が超立体的に統一集合され全宇宙を蓋い尽くし生起している。一切とは、「尽実相・住法位・正当恁麼時・尽十方世界の自己・仏向上」と五W一H「時間・空間・自己・他・行

為・原因・結果」が、一点の正当時全体に円融し蓋尽しているのである。

例えてみれば、無形の垂直の一刹那時間の前後が断ち切れて、二つの電車の一瞬の対面交叉上の静止した永遠時の一点と、列車上の自己の身心の正当時と、客観の尽宇宙の正当時が円融し貫徹している。刹那時間全体相の一点上に、永遠時・刹那生滅時・凡夫時、の三つの時間が円融蔵身貫通された境地なのである。

当に透脱し貫徹した時節には、一刹那時の存在も思念は無い。あえて、言句で表現すれば、刹那時の天辺上の点時を正当時として、当に蓋時が尽宇宙一切を蓋い尽くした境地なのである。蓋時、尽現、果、当観、尽実相と呼ぶのである。

天台大師の「一心前に在り、一切の法後に在りと言わず。亦一切の法前に在り一心後に在りと言わず、一切の法は是れ心なり、故に縦に非ず、横に非ず、一に非ず、異に非ず」である。

この、前後際断した正当時が自己全体の生起であり、時間的視点では有時の時、尽宇宙の空間的存在論で見れば有時の有であり、尽界、全機現である。

大師と禪師の違えは刹那時の一点時の一念が残るのが大師であり、修行によって最終境地の円頓の絶対妙に到るのである。其れに対して、道元は最初から解脱地から法を説かれる。一点時が当一念ではなく、空仮中解脱した、正当時であり、当時である刹那時の思念をも一切無から脱落した境地が、道元禪師の世界であり、坐禅の非思量、不汚染の心、仏向上の事、全機現、又は有時と呼ぶのである。

ここまで、禪師の脱落の境地を論じてきたのは、前文の「時もし去来の相にあらずは上山の時是有時の而今なり。時もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある。これ有時なり」の、文意を明確にするためである。何故なら、この文全体の注解が各師の解釈が異なる。それだけ文の内容が難解であるということである。その難解さを、僅かでも有時の時間論を理解するための手掛かりとなればと思い、長文の解明と成ったのである。本文に戻って論じてみよう。

「時もし去来の相にあらずは、上山の時是有時の而今なり。時もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり」。

禪師は時を二つの観点によって説く。一つは時の去来である。時間の去る来るの進行の無い境地、もう一つは時に去る来るの相が保任し一体と成りきった、その物全体の体験のことである。

前句は時と去来の月（実相・月運）と上山（客観）との即一の関係性を述べるに対し、後句は、時間の進行の去来その物と、自己全体相（主観）との相関を主体的に説明する内容である。

どちらも、有時の而今を表わすけれども、前句は、客観の上山時の自己の顕在全体に主眼があり、有時の而今である。後句は、主観の自己の身心全体に主体の而今である。

「時もし去来の相にあらずは」とは、自己の即今の身心全体の当体と客観の風景の上山との相関をここで述べている。列車内で見ている自己と現われている風景の上山とが不二相関のことである。

自己と上山の不二とは、前章で明らかにしたように、我（見ている自己）逢（即・ガラス窓）人（見られる空間、上山）なり。人（上山）逢（即）人（上山）なり。我（自己）逢（即・ガラス戸）人（上山）なり、脱落の出逢出なりのことだ。

我逢人とは、見ている主観「自己」（雲・舟）と客観「山」（尽虚空尽大地、天水岸）が一体となり蔵身したことである。

ここは、空間論の視点に比重があり、上山と自己の存在(尽虚空尽大地山即雲即舟即月)一体のことである。人逢人(尽虚空尽大地雲舟)とは、山中に自己全体が蔵身し挿入する意味である。足下の自己全体が客観の十方世界に円転し円融(一体・即)するゆえに、全宇宙に蔵身円転されるのである。山即人である。自己の顕在全体が空間存在論的視点で説き明かしている。自己とは、尽十方世界の自己の存在のこと。尽過去から尽未来際まで自らの全宇宙世界である。

それゆえに、自己が山に上った即時即今で、尽十方一切が尽くされ、自己丸ごと顕在が上山の自己が全宇宙に尽くされ、そのまま永遠不滅である。そのことが、時もし去来の相にあらずはの意味なのである。

「時もし相を保任せば、われに有時の而今ある」

前文は、空間論の尽現から説き、本文は時間論から見た蓋時全体を解き明かす。刹那生滅する、超円転運動するリズム全体の蓋時を顕している。前文は、空間論の人逢人の尽十方界の自己、ここは、我逢我(月即舟即雲即岸即尽大地尽虚空)のことである。立ち現われる客観の宇宙世界の山や河と、見ている自己の我とが蔵身し挿入して、蓋宇宙の自己で円転し尽くし切ってしまう。私はこれを蓋時と呼ぶ。蓋時の自己の身心全体の顕現が、そのまま丸ごと永遠である。

どちらにしても、前後際断した正當時の自己の全体相の、時と有を、上山の有時とよび、一点時の自己の当体を、われの有時であり、蓋時なのである。このことを、道元は有時とよぶ。

「かの上山度河の時、この玉殿朱楼の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや」

かのは、かつてのことであるから、上山度河の時は、過去のA時点で山を上り河を渡りし、時点の時空一切ことである。玉殿朱楼とは、A時点→B時点へと歩行し現在に到り、今、此の地に存在する意味である。

前文では、上山の時の自己は上山の自己で尽現し、そして、全宇宙が自己の全時間で、

蓋尽されている意味であった。凡夫から見れば、宇宙界の小さな砂礫のような、自己の生命が、過去のA時点の山を上り、山の中を歩き、河を渡り水で足を濡らし、現在のB時点の玉殿朱楼に到達し、今、此処に存在すると思う。

しかし、当に仏から観ると、始めから当処のA時点の上山の時空で一切を尽くし、河を渡る時空で一切を蓋い尽され、玉殿朱楼の現在のB時点の時空で、一切が蓋い尽くされていると当観するのである。それ故に時間の過去時も未来時も無い。なぜなら、過去にも移動しないし、未来にも移動しないからである。ただ、即時の全宇宙で全結し、上山で全結し、玉殿朱楼で全結する。

「吞却せざらんや吐却せざらんや」

平等と差別のことで、人逢人、我逢我、のことである。吞とは、全宇宙世界に自己が円転され渡河と一体となり、自己が全宇宙に呑みこまれ蔵身円転され挿入してしまう。吐くとは、自己が全宇宙を円転蔵身挿入し尽世界を蓋い尽くしてしまうのだ。

禅師は眼蔵の第五「都機」巻で吞却と吐却をこの様に説かれている。

「盤山宝積禅師云、心月孤円、光吞万象、光非照境、境亦非存、光境俱亡が、復は何物」（心月孤円、光、万象を呑めり。光、境を照らすに非ず、境また存ずるに非ず。光境俱に亡ず、復た是れ何物ぞ）～（中略）万象これ月光にして万象にあらず、このゆゑに、光吞万象なり、万象おのずから月光を吞尽せるがゆゑに光の光を吞却するを光吞万象といふなり、月呑月なるべし光呑月なるべし」

かの上山度河の時、この玉殿朱楼の時を吞却せざらんや吐却せざらんやとは、本文の光吞万象とは同意である。心月孤円とは「仏の非思量の境地」のことで、孤円であり、果の全体である。一つは、仏のこと、二つは、尽実相、仏性、真如のことである。光とは仏の光明を表し万象は森羅万象を現している。

光吞万象とは、仏が尽宇宙世界を円転蔵身するを、呑むと説く。呑む吐くとは、別に、自分の口が開閉して、宇宙を吞吐するわけではない。我逢人、人逢人、我逢我、出逢出、を示している。自己と尽宇宙が円融蔵身（即・一体）することである。ここは、二つの物が接着する意味の即ではない。道元は脱落地（非思量）であるから、尽宇宙、万象を呑み込み尽くしてしまうこと。境（客観）を照らすに非ず、境また存ずるにあらず、光境俱（主・客）に亡ず。ここまでの、盤山禅師の見解である。

道元はすべて仏位の「解脱・非思量」の脱落地の境地から説かれる。万象である尽宇宙世界が月光の尽実相にして、万象にあらざるゆゑに、光吞万象なりである。亦万象が月光を吞尽する。光吞万象は自己が宇宙を呑み、万象が月光を、吞尽は宇宙が自己を飲

み尽くすことである。吞却吐却（主客脱落）とは、解脱した境地から、自己の身心全体と尽宇宙の円融を説き明かしている。

「われに有時の而今ある、これ有時なり、かの上山度河の時、この玉殿朱楼の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや」

有時の蓋時と尽現のことである。かの過去の山を上った時、河を渡った時、この玉殿朱楼の時で一切を呑み尽くし、吐き尽くされていたのである。山の時、河の時、現在の玉殿朱楼の時は、時間の流れが連続していなかったのだ。光呑万象であるから、上山の時は時で呑み尽くし、山中にて自己は吐き尽くされていたのである。

禪師は「都機」巻で、吞尽・吐尽を、この様に述べている。「吞却尽なり吐却尽なり。尽地尽天吐却なり、蓋天盖地吞却なり、吞自吞他すべし、吐自吐他すべし」。上山の時、度河の時、玉殿の時、吐の蓋時、呑の尽現で、全結し尽くされていたのだ。全結した時は、尽天地・尽自己・他己(尽大地岸舟雲月)が、吐却されて、蓋天地・蓋自己・他己が、吞却されていたのである。

全自己の存在が全宇宙一切に円転し吞却（蔵身）され、全自己が尽宇宙を円転し吐却（蔵身）する。巻頭の「蓋時」章の深深海底行であり、高高峯頂立であり、尽現であり、蓋時である。上山のときも玉殿朱楼ときも、吞却の尽現であり、吐却の蓋時である。

三頭八臂はきのうふの時なり、丈六八尺はけふの時なり。しかあれども、その昨今の道理、ただこれ山のなかに直入して、千峯万峯みわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂もすなわちわが有時にて一経す、彼方にあるにたれども而今なり。丈六八尺もすなわちわが有時にて一経す、彼処にあるにたれども而今なり。

「三頭八臂はきのふの時なり」三頭八臂とは不動明王のことである。怒り狂った自己は昨日の自己の時間であった。今日は、丈六八尺の柔和円満な仏のようなわたしである。憤怒相の時間の昨日は過ぎ去り、怒った場所と時間のA点時空から→柔和円満な現在のB点時空の、この場所と日時で、何事も無かったように微笑している。凡夫から見ればこのように理解する。

「その昨今の道理、ただこれ山のなかに直入して、千峯万峯をみわたす時節なり」しかあれども、そうであるけれども、道元は凡夫の時空観を否定してしまう。

前文の尽現と蓋時の延長であるから、此処は仏の観点の開示である。そうであるけれども、その昨今の道理、昨今とは空間と時間の進行のことだ。昨日今日の道理の真実のありようは、ただこれ山のなかに直入して、千峯万峯をみわたす時節なり。ただとは、したすらのことであるから、山のなかに直入する、自己が山と一体と成ってしまうこと。

山中人のことである。要するに上山の時節で全結する。このような時節の時は、千峯万峯みわたす時節なり、高高峯頂立であり、自己も尽宇宙も大地も虚空も山も河も各々が蓋時である。尽界が頭々物々時々なりである。

「すぎぬるにあらず、三頭八臂もすなはちわが有時で一経す、彼方にあるににたれども而今なり」

すぎぬるにあらずとは、過ぎ去って、遙か彼方に時間も空間も、忘却し過ぎ去ってしまったと思う。あるににたれども、実は過ぎぬるにあらずだから、移動しないで即今に存在したのであった。怒った自己の身心全体で全宇宙は尽くされていたのである。そして、次の柔和円満な丈六八尺の自己も、全宇宙で全結されているのである。

『御抄』の経豪は「三頭八臂の時は前後際断し丈六八尺の時は又前後際断するなり三頭八臂の時は尽十方界森羅万象諸法始中終三頭八臂なるべし」、怒りの自己も、仏のような私も、前後際断し、全宇宙一切が怒りの自己で尽くされると、このように説いている。

蓋時章に戻って、文全体を考えてみよう。古仏言の、次の「高々高峯頂立深々海底行」の二句は、自己の身心全体を主体にした内容である。そして、三頭八臂丈六八尺の二句は、意識の動揺による心理的境地を示している。

ここは、客観と自己の心理的境地と、時間の進行が問題のテーマとしている。前の句の、有時高々頂立が我逢我なりであり、客観の山の中に三頭八臂（怒りの自己）が円融してしまっただけであり、そのことが山に直入することである。そして、万物一切の一物一個が、高々峯頂立である。千峯万峯とは、一切の存在物が、独立独歩の住法位で、尽十方を尽くしている世界のことである。その時空世界を仏から当に観ると、千峯万峯を見渡す時節である。

「すぎぬるにあらず、三頭八臂もすなはちわが有時にて一経す、彼方にあるににたれども而今なり。丈六八尺もすなはちわが有時にて一経す。彼処にあるににたれども而今なり」

前後際断した正當時全体のことである。すぎぬるにあらずとは、「われに時あるべし、われすでにあり、時さるべからず」、の当所の過ぎ去らない位置であり、法住法位の自己全体のことである。

過去A時点の怒った自己全体が、自己の有時、尽現、高々峯頂立、にて一経す、一回で完結すること。怒った自己の尽現で究尽している。不動明王のように、怒った時空は遠方に過ぎ去って、彼方のA時空にあるように思うけれども、即今即処の十方世界の自己で究め尽くされていたのである。当時の仏のような私はB時空全体が尽現で尽くされている。彼処とは、そこ、そば、の意味である。自己の即今の身心全体と、離れた過去

の出来事であったのように思うけれども、真実は即今の尽現で尽くされているのだ。

『御抄』が説くように、三頭八臂も丈六八尺も、前後際断した、正当時全体であると説き、三頭八臂の時は尽十方界（尽宇宙）森羅諸法始中終（時間の過現未）三頭八臂で尽くされているとも語っている。このように、一連の文の真意は前後際断した、正当時当体を空間・存在論の視点で明らかにしている。

しかあれば、松も時なり、竹も時なり。時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。有時の道を経聞せざるは、すぎるとのみ学するによりてなり。要をとりていはば、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時々なり。有時なるによりて吾有時なり。

「しかあれば、松も時なり、竹も時なり、それゆえに」、松は松で蓋時であり、竹は竹で、独立独歩の蓋時である。「時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば間隙ありぬべし」ここは、凡夫の時間観の再考を促すのである。時は飛去するとのみ解会すべからず。時間の流れが、未来から過去に過ぎ去るだけが、全てであると理解してはいけない。

前文は仏の観点をもって、自己や存在物のありのままの姿相の説明であった。それにたいし、本文は一転して、凡夫の時間が顛倒妄想であることを、道元は説き明かす。仏から当に観るとき、時間の矢は過去→現在→未来に直線的に進行するだけが、時間の働ではあると考えてはいけない。

凡夫は時間の一面である、去るの過去、そして現在、来るの未来、結果として、過去に過去へと過ぎ去って行くように思い込んでいる。列車の運行のように、自己の時間は未来に向かって直進する。そして、過去へ飛び去って行く。列車の進行と同時に窓の外景色も過去へ流れて行く。道元は、過去へ過ぎ去ることだけが、時間の働きの全てではないことを明らかにする。

「時もし一任せば、間隙ありぬべし」、時が一方的に直進するだけならば、自己並びに、万物との間に隙間ができ、時だけが飛び去ってしまう。このように考える者は、有時の真実の道理を学ぶことがないために、過ぎ去ることが全てであると参学するからである。

「要をとりていはば、尽界にあらゆる尽有はつらなりながら時々なり、有時なるによりて吾が有時なり」

禅師は時の真実相とは何かを明らかにする。尽界にあらゆる尽有とは、尽界とは尽宇

宙、尽十方世界のこと。尽有とは、そこに存在する物々である。一切の森羅万象と物々が一如となり、結び連なっているのか。それとも、自己の身心と一如をつらなりと云うのか、この三つの視点が考えられる。

『御抄』は、排列の意味だと述べている。そして、物を並居たる姿を云ことではなく、凡夫の見であるとも語っている。「このつらなると云は只一法究尽の道理を列なると可云、云々」。一法究尽とは、人逢人、我逢我、のことである。又は平等と差別が円融し脱落した境地である。

ここの文意は、電車の自己の喩話によって説明したほうが理解しやすい。見る自己と見られる、客観の外の風景の円融と蔵身のことである。車内の椅子の自己が主観の「我」、
「人」が客観の風景、車内の女性とは尽界尽有のことだ。

身心脱落すると、ガラス窓が落下貫通し、落地透脱する。漸源の世界崩壊の時節である。「我」と「人」の「と」の間が「逢」（即）となり、落下透脱する。虚空落地することによって、我人が無二脱落となってしまう。脱落した無の観点にたつと、「人」の風景の時空世界と、「我」が蔵身し円融し、自己が消滅してしまう。我の丸ごと自己に人の尽時空一切が円融転円し蔵身し挿入してしまう。一法究尽のことで、我に人が亡じ、人に我が無二となる。一法に究め尽くされることを究尽と呼ぶ。

当に正當時とは、自己が外の尽界に挿入し亡じ尽くした、我から観た世界のこと。尽界と尽有は宇宙空間と存在物のことである。尽界のあらゆる尽有は、全宇宙空間に存在する、一切の存在物とは、尽現のことで、各々が尽実相であり、そして、存在物の全ての各々が蓋時である。当体の自己も蓋時、花も蓋時、草も蓋時。蓋時を自己とよび、蓋時を花とよぶ。

たんなる蓋時ではなく、蓋時に円融統一されて現成している。各々も同意である。つらなりながら時々であり、各々が独立独歩で尽十方界が尽くされ、時は能動的正当時全体が一瞬起・一瞬滅、なのだ。

無数の蓋時の各々が立錫し尽現している。全宇宙全体が生起・生滅し交響共鳴共感林立を、つらなりながら時々とよぶ。各個・物々の各自が住法位で絶対唯一の蓋時の自己で、全宇宙を尽くし切っているのである。有時なるによりて吾有時なり、一切が蓋時でつくされるように、自己の存在全体も蓋時で界尽されているのである。